『三彌底部論』の研究——我に関する章——（下・未完）

加治洋一

本稿は、本誌42号（一九八五）、46号（一九八七）に、同じ題名のもとに既発表の拙稿の続編である。従って、『三彌底部論』全体の構成等については、本誌42号を参照して戴くと幸いである。なお輪廻の主体に関する議論から導かれる中有の存在に関する議論については、『大谷学報』67巻2号（一九八七）、67巻4号（一九八八）に、『『三彌底部論』の解読研究——中有の存在に関する議論——上・下」と題して発表済みである。併せて参照されたい。

Ⅲ　我についての他部派の見解に対する批判

1　主題の確認

問曰。云何人捨此有更受異有。答。如修多羅意。教化力可知。五盛陰成人以為実人。以五盛陰成人以為実人故。不可言人常無常。如是。難曰。前章所説無我為首。各有所執。云何解釈。令得開解。

〔他部派〕プドガラがこの生存を捨て、次いで別の生存を受けるとはどういうことなのか。

〔正量部〕経に説かれている通りの意味である。五取蘊が構成しているプドガラを勝手に真実のプドガラであると憶断していることを、教化の力によって知らなければならない。五取蘊が構成しているプドガラを勝手に真実のプドガラであると考えているのだから、プドガラの常・無常やそういった類

のことについて言及してはならないのだ。

〔他〕前の章で説かれた主張は、我が存在しないという主張を初めとして、孰れにも執われている点があることになる。それぞれの主張を、どのように解釈するのか、我我に理解できるよう闡明して欲しい。

2　我の存在についての他部派の見解に対する批判

①　我が存在しないという主張に対する批判

イ　苦の生滅を我に敷衍してはならない

〔正〕前に引かれた主張は、苦が生起する時には〔その生起しているという〕そのことのみであるから、我は存在しない、ということであった。この主張について今から述べよう。

苦について言うなら、苦とは生じ滅するものであり、その生滅ということが、苦の本質である。仏は、この苦の本質を顕かに示そうとして、カッチャーヤナ（Kaccāyana, Skt. Kātyāyana）に「唯苦が生じた時には生じたのみであり、唯苦が滅した時には滅したのみである」と説き明かされたのである。このことに基づいて我の相の生滅に言及してはならない。

以上、仏の説き示されたのは、右の如くであると理解しなければならない。

答。如前所説。苦起而已。無我如是。我等今説。苦者苦生滅是苦性。仏欲顕示苦性。語迦旃延言。苦生生苦滅滅。我相生滅不可言。是故仏説如是。

この段から、Ⅱ2①で列挙された他部派が主張する無我説を順番に批判する。

「我相生滅不可言」とは、即ち我の存在について、その相の生滅を根拠にして云々してはならない、という意味であろう。

ロ　施設されている

復次如前所説。無説故無我。如是。我等今説。我等相従信受。如仏為外道説。雖有我是仮名我不実。説我依有漏陰。仏見去来法説是我非実我。如仏説依行。行故受名。是故仏説。説名我如是。

また次に、前に引かれた〔仏が〕施設されていないから我は存在しないとする主張について、今から述べよう。ともあれ我我は、お互いに相手の言うことに耳を傾け、信受し合わなければならない。

仏が外道の者の為に次のように説かれている――我が存在すると言っても、それは仮名であって、我が実体としてあるのではない、と。ここで「我」と説かれているものは、有漏の蘊に依ったものである。つまり、仏は、去来する法を観察して、これは我ではあるが、真実の我ではない、と説かれているのである。

このように、仏が説かれたのは有為法という点から説かれたのである。そもそも有為法である以上〔仮に〕名付けられるものであって、その意味で、仏は施設されているのである。説いて我と名付けておられるのだ。

この「如仏説依行。行故受名。是故仏説」は、Ⅳ2の依説のプドガラを検討する箇所で説かれる「是是行所依説。是是其名安是名依説」という一節と対応する表現であると思われる。詳しくはⅣ2の当該箇所を参照されたい。又最後の「説名我如是」を国訳は「説〔施設〕を我と名くること是くの如し。」と読むが、これは「無説故無我」を否定するものであり「無説」に対して「説」と言っているのであるから「説きて我と名づく」と読むべきであろう。

ハ　蘊は無我であるが、それを我と名付ける

復次如前所説。自見其身故無我。如是。我等今説答曰。無明所覆。五陰無我謂為我。如新生無知小児。見余母人謂為其母。五陰無我謂為我亦復

また次に、前に説かれた、自ら自分自身の身体を考慮すれば分かることであるから、我は存在しないとする主張について、今から我我の考えを述べよう。

無明に覆われた者は、五蘊は無我であるのに、それを我であるという。そ

如是。是仏所説如是。

復次如前所説。無我。我我所不可得故。如是。我等今説答曰。仏説依不自在我我所実性不可得。如是。為他所制者不名自制。若自制者不名他制。是故断自他制不断我。如是。

復次如前所説。不実言有故無我。如是。我等今説答。不実有故。不実与無法共合無而言有。此言難信。是故断無言有不断我。如是。

れは例えば、生まれて間もない無知の小児が、他人の母親を見て、その者を自分の母であると考えるようなもので、五蘊は無我であるが、〔無知な者が〕それを我であると言うのも同様である。

前に引かれた仏の教えは、以上のような意味である。

ニ　自在でないから把握できない

また次に、我が存在しないのは我も我所も把握されないからである、とする前に引かれた主張について、今から吟味し答えよう。

仏は、自在でない以上、我も我所も確かにその本質として把握することはできない、と説かれたのである。

他によって規制されるものは自制ではない。もしも自ら規制すれば他制ではない〔しかしこの両者は孰れにせよ規制であって、自在ではない〕。それ故、自らの規制と、他からの規制との両者の規制〔即ち不自在〕を断じたのであって、我を断じているのではない。

ホ　実体がないとは我の否定ではない

また次に、実体なきものについて「存在する」と言っているのだから、我は存在しない、とする前に説かれた主張について、今から説こう。

実体なきものとして存在するからである。「実体のないもの」も、「法でないもの」も、両者共にそのものが存在しないことを意味する。然るに、〔それを仏が〕「存在する」と言われており、〔その仏の言葉をブンナが〕「この言葉は信じ難い」と言っている。〔彼等の主張するように、これを「我が存

在しない」という意味に理解してよいのであれば、「信じ難い」という語を発する筈がないではないか。プンナが「信じ難い」と言っている以上」それ故、無を断じて、有と言われているのであり、我を否定された訳ではないのだ。

Ⅱ2①ホで註したように、この一段は理解しづらい。右の訳も全くの試訳であり、こういった類の議論であろうと推察することもできるということであって、確かな所は明かでない。諸兄のご教示を仰ぎたい。

② 我の存在・非存在の判断は控えるべきであるという主張に対する批判

イ 相を規定できなくても、存在については判断し得る

幾つかの部派は前に説かれたように、我の相を規定できないから、我が存在するとも、我は存在しないとも言ってはならないと主張する。この主張について、今から述べよう。

確かに我について、常の相がある、無常の相がある等と言ってはならない。しかし、我が存在する等とは説くことができるのである。

例えば仏は「自分の身体を初めとして総てのものを火で炙った者がいる」と説かれているし、また例えば仏は「教えを聞くこともなく、真の智慧もない凡夫は、悪業がその本性であり、聡明な人は、善業がその本質である」と説かれている。

それ故、この幾つかの部派の主張に基づいてはならないのである。

如諸部前所説。相不可説故。不可説有我無我。如是。我等今説曰。我常無常相等不可説。有我等可説。如仏説有人自炙身等一切。復次如仏説。無聞無知凡夫以悪業為相。聡明之人以善業為相。是故諸部語不可依。如是。

以下、Ⅱ2②で他部派が展開した、我の存在・非存在については判断してはならないとする説に対して、順番に批

判する。

この段で引かれる経典が、しばしば我に関する議論の中に引用されるのは、恐らくこれ等の経典で、pudgala (sattva, jiva, etc.) が "asti" 或は "bhavati" と説かれているからであろう。しかし、前者の経を引いて我の存在の教証とするⅡ2③ニに対しては、Ⅲ2③ニで批判を加えている。

ロ　問の立て方が適切でない

如諸部前所説。有我無我直置問不記故。如是。我等今説。問不相応故。是故直置。相応故不直置。如仏記。無知凡夫人不善。聡明人善。是故諸部語不可依。如是。

幾つかの部派は、前に説かれたように、我が存在する、或は存在しないというのは捨置記 (sthāpanīya-vyākaraṇa) であるから、〔言及してはならない〕と主張する。この主張について今から論じよう。

問の立て方が適切でないから、それ故答を捨置されたのであり、正しければ捨置されることはない。例えば仏は「無知な凡夫の人は不善であり、聡明な人は善である」と説かれている。

それ故、これ等の部派の主張に依ってはならないのである。

ハ　正しく考察していない

如諸部前所説。有我無我不可説定異故。如是。我等今説。若我験者応是行為異行。如是正説。為是行為異行応説。是故応遣諸部語不可依。如是。

幾つかの部派は、前に説かれたように、我が存在するとも、我は存在しないとも言ってはならない、互いに矛盾した規定が結びつくからである、と主張する。この主張について、今から論じよう。

〔彼等は〕我について明かであって〔互いに矛盾した規定が結びつくと主張しているのであるから〕それは有為法であり、かつ有為法とは異なるものであるのだから〔不可説などと言わずに〕そのように〔有為法であり、かつ有為法とは異なると〕結論する事が出来る筈である。〔さもなければ〕正に

これは有為法であるのか、それとも、有為法とは異なるのかを〔孰れかに決定して〕説かなければならない。

それ故、これ等の部派の主張は拒否しなければならないし、それに基づいてはならないのである。

「応是行為異行」と「為是行為異行」とを右のように訳し分けるのは、稍強引かも知れない。「若我験者……」以下は、次のように理解することもできる。

もしも、我について明かであるのであれば、それが有為法であるのか、有為法とは異なったものであるのかを、〔不可説などと言わずに〕そのように結論する事が出来る筈である。〔従って〕正に、それが有為法であるのか、それとも有為法とは異なるのかを〔孰れかに決定して〕説くべきである。……以下同じ。

ニ　存在の仕方が異なる

幾つかの部派は、前に説かれたように、我が存在するとも、我は存在しないとも言ってはならない。常でもあり無常でもあることになるからである、と主張する。この主張について今から論駁しよう。

もしも我を、存在と非存在の二つの範疇で論ずると、断見と常見とに陥る。この二つの観点から物事を論ずることは、仏が禁止されている。それ故、プドガラは存在しないと言えば、それは誤謬である。しかし、〔存在・非存在を論じてはならないという〕無記の類も、この主張は正しくない。何故なら、もしもプドガラは存在しないと言えば、これは邪見であるが、プドガラが存在すると言うのは、これは正見だからである。それ故、プドガラは存在すると言わなければならない。

如諸部前所説。有我無我不可説。常無常故。如是。我等今説。若我有無中可説。成断見常見。若依此二見仏所不許。若言無人者成過。不記之類此言不可。何以故。若言無人者是名邪見。若言有人者是名正見。是故有人可説。如修多羅中説。若言無人名為邪見。若言有人名為我見。若言有者是其常無常故。若如此者行成常無常故。若同有有者行無常無為常。人

不如是。同有不同常無常応可知。如是。

例えば経に次のように説かれている――もしもプドガラが存在しないと言えば、これを邪見と名付ける。もしもプドガラが存在すると言えば、これを我見と名付ける、と。これは、もしも存在すると言えば、〔ここでそのように主張するプドガラは〕常でもあり無常でもあることになるからである。即ち、もしそれを許せば、有為法に常と無常の両者があることになるからである。確かに、物が存在するのと同じ在り方で存在するのであれば、有為法は無常であるし、無為法は常である。しかし、プドガラはそのような在り方をしているのではない。〔存在するという点では〕物と同じく存在すると言えるが、常・無常という在り方まで同じにしているのではない。以上の如くであると知るべきである。

「若同有有者」以下非常に読みづらく、国訳も「読方明かならず」と註す。今は但だ文意が通じるように訳してみたが定かではない。一応書き下せば次のようになる。

若し有に同じく有らば、行は無常、無為は常なるも、人は是くの如くならず。有に同じなるも常無常に同じからず（或は、同じく有れども常無常を同じくせず）。

ホ　有の依止が説かれている

如諸部前所説。有我無我不可説。有無中依止故。我等今説。若都無我。仏不応説有依止。是仏説有依止故。是故有我可説。如是。

幾つかの部派は、前に説かれたように、我が存在するとも、我は存在しないとも言ってはならない。有と無という範疇に拠っているからである、と主張する。この主張について今から論じよう。

もしも、完全に我が存在しないのであるなら、仏は有に拠ることを説かれなかったに違いない〔全く存在しないものについて、有無の二辺を説くのは

矛盾である」。つまり、仏が有に拠ることも説かれている以上、それ故、我は存在すると説かなければならない。

③　我が存在するという主張に対する批判

イ　我が存在しなくとも繋縛することに矛盾は生じない

幾つかの部派は、前に説かれたように、我は存在する、繋縛ということが説かれているからである、と主張する。この主張について今から反論しよう。

縛るべき人が居なくても「縛る」ということはある。例えば、王の牢獄での捕縛の様なものである。そこに人が居なくても、捕縛するということはあるし、結びつけるということもあるのである。或いは、縄さえあれば結ぶということはあるが、縄が無ければ結ぶということもないのと同様である。そのように、我が存在しなくても、繋縛ということを説くことはあるのである。

以下、Ⅱ2③で展開された、我が存在するという諸部派の主張を順番に批判して行く。

この「王獄縛」の意味も分明でない。何か事跡があるのかも知れない。御教示戴けると幸いである。

ロ　有漏の五蘊である

幾つかの部派は、前に説かれたように、我は存在する、それが正見だからである、と主張する。この主張について今から述べよう。

〔彼等が教証として引く経では〕有漏の五蘊によって、仏は〔「化生の」〕プドガラ有り」と説かれたのであって、そのプドガラが「〔化生の〕プドガラ有り」と見るのであるから、それを正見と名づけるのである。

如諸部前所説。有我。語縛故。如是。我等今説。無人可縛而有縛。如王獄縛。雖無人而有縛有結。如有縄有結無縄無結。如是。無我而有語縛。如是。

如諸部前所説。有我。正見故。如是。我等今説。依有漏陰仏説有人。以人見有人故。名為正見。如是。

この段とほぼ平衡した議論が、『倶舎論』破我品にあり、「補特伽羅定応実有。以契経説諸有撥無化生有情、邪見摂

故。誰言無有化生有情。如仏所言我説有故。謂蘊相続能往後世、不由胎卵湿、名化生有情。撥此為無故邪見摂。化生諸蘊理実有故。」（大29・155中）とある。

ハ　唯心のみと説かれている

如諸部前所説。有我。仏説四念故。如是。我等今説。仏語迦旃延。唯心而已。欲顕身受心法故。説唯心而已。成諸法更無異。如是。

幾つかの部派は、前に説かれたように、我は存在する、仏が四念住を説かれているからである、と主張する。この主張について今から説こう。

仏がカッチャーヤナに語られている――〔心念住に於てあるのは〕唯心のみである、と。身・受・心・法の四念住について顕かに示そうとされて、〔心念住に於ては〕唯心のみであると説かれたのであり、他の三念住についてもそれぞれ同じことが成立するので、全く差異はない。〔従って、四念住に於て、観察する主体としての我は存在しない。〕

この段については、『識身足論』巻三の「汝然此不。謂契経中世尊善語善詞善説。有四念住。身念住、受心法念住。彼答言爾。問言。具寿。慈与何等念住相応、為身念住耶、為受心法念住耶。若言身念住相応則不縁有情。以身念住唯縁身故。若言受念住相応則不縁有情。以受念住唯縁受故。若言心念住相応則不縁有情。以心念住唯縁心故。若言法念住相応則不縁有情。以法念住唯縁法故。若言不与身念住受心法念住相応、即応別有第五有情念住慈与彼相応。此念住世尊不現等覚。」（大26・544中）という議論等を参考にすべきであろう。

ニ　十二処である

如諸部前所説。有我。仏説声聞故。如是。我等今説。声聞説処。依止法声聞説而已更無異。

幾つかの部派は、前に説かれたように、我は存在する、仏が声聞の過去について説かれているからである、と主張する。この主張について今から述べよう。

仏が「声聞」と説かれたのは、〔そのような現象の拠り所である〕十二処

を声聞と説かれたのであり、法〔＝有為法〕に依って声聞と説かれたので、正しくそれだけのことであって、それ以外の何物でもない。

「依止法」とはつまり五蘊相続に拠るという意味であろう。

ホ　我が存在しないとする主張と同類である

幾つかの部派は、前に説かれたように、我は存在する、〔仏がそのように〕説かれているからである、と主張する。この主張について今から説こう。〔彼等が教証として引いた経で〕仏が「プドガラ有り」と説かれたのは、仮名として説かれたのである。それ故、この主張は〔その儘〕我が存在しないとする主張に与することになるのである。

この一段の議論は、Ⅳのプドガラの種類を検討する章を参照すべきものである。Ⅳでは、依説のプドガラ、度説のプドガラ、滅説のプドガラという三種のプドガラを立てて検討を加えている。

④　我の存在に関する議論のまとめ

もしも、実際に我が存在しないなら、殺生ということが成立しないし、殺す者も存在せず、殺される者も居ないことになる。更に、偸盗も邪婬も妄語も飲酒も同様に成立しないことになる。我が存在しないとはそういうことである。

又、もしも我が存在しなかったら、五逆もないし、諸々の感覚器官が縦にするに任せても善業や悪業を起す者が居ないし、繫縛もなければ、繫縛から解放される者もなく、繫縛される者も居ないことになる。〔業の〕作者もなく、業もなく、その果報も存在しないことになる。つまり、もしも業がなけ

如諸部前所説。有我。有説故如是。我等今説。仏説有人仮名。是故是其朋無我。

若実無我不成殺生殺者亦無所殺。亦無偸盗邪婬妄語飲酒亦如是。如是無我。若無我者五逆亦無。縦任諸根無起善悪者。無縛無解縛者亦無所縛。亦無作者亦無業亦無報。若業無者果報亦無。業果報無者亦無生死。而衆生以業果報輪転生死。若無生死者生死因亦無。若無因者因滅亦無。若因

滅無者趣道亦無。如是四諦亦無。若無四諦亦無仏説四諦。若無仏者亦無有僧。如是無人者三宝四諦亦無。如是諸説並所不応。以是故無人者成上諸過。後過亦生。若有人有我者。上所説無過。如仏説修多羅。真応当知。是故実有我。

ればその果報もないし、業の果報がなければ、生死することもなくなる。しかし、それにも拘らず現実に、衆生は業の果報によって生死に輪廻流転しているのである。

もしも生死〔＝苦諦〕がなければ、生死の因〔＝集諦〕もない。もしも因がなければ、因の滅〔＝滅諦〕もない。もしも因の滅がなければ道に趣くこと〔＝道諦〕もない。このようにして、四諦が存在しないことになる。もしも四諦がなければ、四諦を説かれる仏もおられないことになる。もしも仏がおられなければ、サンガが成立することもないのである。このように、プドガラが存在しなければ、三宝も四諦もありえないことになる。

以上検討してきた我の存在に関する様様な主張は、おしなべて正しいものではない。即ち、プドガラが存在しなければ、右に述べた諸諸の過失が成立するし、更に後に述べる過失も生じるのである。もしも、プドガラが存在し、我が存在すれば、今述べた如き過失はない。

仏が経に説かれたことは、説かれた通りに真に正しく理解しなければならない。それ故、確かに我は存在するのである。

この段で、プドガラが存在するという正量部の正義を示す。この部が主張するプドガラが極めて具体的であり、業論や修道との主体的な関わりに基づいて主張されていることを看て取ることができる。

3　プドガラと五蘊との関係についての他部派の見解に対する批判

①　五蘊がプドガラであるとする主張に対する批判

如諸部前所説。五陰是人是我。界門故。如是。我等今説。若人命我異是修多羅不顕有我。為陰是我我是陰。若陰是我陰可説我不可説。若我是陰我可説陰不可説。亦可両可説非五陰是我。如是。

幾つかの部派は、前に説かれたように、五蘊がプドガラであり、我である、六処が〔プドガラであると説かれている〕からである、と主張する。この主張について今から論じよう。

もしも、プドガラが、命者（jīva）や我（ātman）と別のものであったら、彼等が引いた様様な経は、我が存在するということを顕わしているのではないことになる。

そもそも五蘊が我であるのか、我が五蘊であるのか、孰れであろうか。もしも蘊が我であるなら、蘊については陳述できるが、我は説くことができない筈である。もしも我が蘊であるなら、我については陳述できるが、蘊は説くことができない筈である。〔この二つの命題を〕二つながら可とする以上、五蘊と我とは別別のものであると説かなければならない。

Ⅱ３①に対する批判である。前半は、pudgala が、ātman, jīva, sattva, etc. と同義で用いられる事に基づく議論である。なお、Ⅱ３①で引用されていた『外国に最上の女人あり』という経は、DN 9. Poṭṭhapāda S. (i 193) に対応部分を持つ。このことは、DN 9 の当該エピソードを中心とする箇所が、独立した経であったことを示唆している。後半の議論は理解し難い。一応右の解釈も成立するかとも思うが、或は独特の論理学を持っていたのかも知れない。識者の助言を乞う。

② プドガラと五蘊は別のものであるとする主張に対する批判

イ 身体全体の一部分の如くである

如諸部前所説。人異五陰。如担重担

幾つかの部派は、前に説かれたように、プドガラは五蘊と別のものである、

人故。如是。我等今説。依担故説有担。若我異陰。壊時起時我亦起亦滅。如斫身一分。我亦応一分。如是一分成多分。一分多分還成一。随身存時命亦随存。命存時身亦存。是故陰即是我。是語可遣。如是。

重荷を担う人のようなものだからである、と主張する。この主張について、今から述べよう。

担うということがあるから、それを〔仏は〕「担う者がいる」と説いたのである。

もしも我が蘊と別のものであるなら、〔蘊が〕壊滅する時や生起する時に、〔それとは関わりなく〕我も生起したり壊滅したりするであろう。それは例えば、身体の一分を斫り取るようなものであろう。つまり、我も全体の一部分であることになる。しかしそうであるにしても、部分部分が集まって、より大きな部分を造り上げるのであり、部分がより大きな部分となり、一つの全体に再び統合されるのである。しかも、身体が存続する期間に相応して命(jiva)も存続するのであり、命が存続している間、身体も存続しているのである。従って、蘊がその儘我であることになる。〔このような矛盾を内包しているのであるから〕この主張は拒否すべきである。

以下、Ⅱ3②で展開された、プドガラと五蘊が別のものであるとする諸部派の主張を順番に批判する。

「依担故説有担」の文も何通りかに読み得る。上の「担」を荷物の意味に取れば、「荷物に依って初めて担う者が居ると説くことができるのであるから、別のものであるとは言えない」ということになるだろうし、上の「担」を動作の意味に取ると本文のようになる。孰れにせよ、我と蘊とが別のものであるという主張を否定しさえすれば良い訳だから可能であろう。或は『倶舎論』破我品で、この経を引く補特伽羅論者に対して「即五取蘊自相逼害、得重担名。前前刹那引後後故、名為荷者。故非実有補特伽羅」(大29・155中)と批判するが、この『倶舎論』の議論がかなり熟したものであるとすれば、「前刹那の五蘊である担に依って、次刹那の五蘊である担があると説くのである」と理解することも可能であろう。

如諸部前所説。人異陰。取愛為其二故。如是。我等今説。若人正見無疑。如人有愛繫縛。輪転生死仏欲顕示。仏言人取愛為其第二長処生死。愛断時無復輪転。是故我不異陰。如是。

ロ　愛を断じると流転しない

幾つかの部派は、前に説かれたように、プドガラと蘊とは別のものである、取（upādāna）と愛（tṛṣṇā）とをその第二のもの〔＝所縁〕にするからである、と主張する。この主張について、今から説こう。もし、人が正しく考察すれば疑いを生じることはないのである。

人に愛の繫縛があると、生死に流転するということを顕示されようとして、仏は次のように説かれたのである――人は取と愛とを、第二のもの〔＝所縁〕として、長く生死の境涯に留まる。愛が断滅した時には、もはや更に流転することはない、と。〔即ち流転する五蘊以外に何かが存在すると説いている訳ではない。〕それ故、我は蘊と別のものではない。

如諸部前所説。人与陰各。受業果故。如是。我等今説。依有漏生死。此生来生受其果報。是故人与陰不各。

ハ　有漏の五蘊である

幾つかの部派は、前に説かれたように、プドガラと蘊とはそれぞれ独立したものである、業の果報を受けるからである、と主張する。この主張について今から述べよう。

有漏の五蘊に依って生じ死すから、この生涯や次の生涯で、その果報を受けるのである。それ故、プドガラと蘊とはそれぞれ独立したものとは言えない。

ロ・ハの二段は、ほぼ同趣旨の議論である。流転しているのは有漏なる五蘊相続であり、それに依って他部派の我が立てられているのであるから、別のものであるとは言えない、とする。つまり、愛・取が断ち切られるとは、五蘊の相続が絶ち切られるということであるし、その相続が続く限り、業の果報をその相続が引き受ける、とそれぞれの

経は説いているのであって、そこに独立したプドガラが立てられているのではない、と批判するのである。

ニ　度説のプドガラである

復次如諸部前所説。人与陰各。是我説故。如是。我等今説。依度説。仏言。我過去無数阿僧祇劫時。曾為頂生王。是故人与陰不各。如是。

また次に、幾つかの部派は、前に説かれたように、プドガラと蘊とはそれぞれ独立したものである〔仏が過去の何某は〕私であると説かれているからである、と主張する。この主張について今から説こう。

度説（有為法を三世に分別して説く方便説）によって、仏は「私は、過去無数阿僧祇劫の時に、かつて頂生王であった」と説かれたのである。

それ故、プドガラと蘊とは、それぞれ独立したものではないのである。

この「度説」については、詳しくはⅣ3を参照されたい。Ⅳでプドガラの種類を検討し、依説のプドガラ、度説のプドガラ、滅説のプドガラの三種を立てている。この節で「度説」と言っているのは、三世に属する有為法、即ち五蘊に依ってプドガラが立てられているのだから、別のものであると言ってはならない、という前節の主張と同趣旨のことを言っているのである。

ホ　別のものであるとも説かれていない

復次如諸部前所説。人与陰各。不記処説故。如是。我等今説。陰我異不異不可説。是故法相以常無常為首不可説。我亦不可説。

また次に、幾つかの部派は、前に説かれたように、プドガラと蘊とはそれぞれ独立したものである、〔プドガラの常・無常は〕無記に収められる問題であるからである、と主張する。この主張について今から論駁しよう。

〔説かれていないからといって〕蘊と我とが別のものであるとも、別のものでないとも言うことはできない。つまり、法の相について常・無常を以て第一義的なものとして説いてはならないし、我についても同様に〔常・無常を第一のものとして〕説いてはならないのである。

若我異陰者仏言。我異身異仏所不記。修多羅所不明。若我異陰者。亦可在陰中亦可遍一切処。若在陰中、斫身時破身時、我応可見。如蚊在優曇婆羅果中。破優曇婆羅果時蚊可見。我在陰中亦復如是。若我異身、冷熱触身、我不応覚知。復次若挑眼時。倍応見物。如是。諸根壊時。声香味触等。亦応覚知。如是。復次若我異身。従此身入彼身還来入身。如人従此屋入彼屋還入此屋。我異者応如是。復次我異陰者。我不応処処受生。若処処受生応一念遍処受生。是故不応常在身中故。解脱難得。若処処行不応作業。若無業果亦無功業。亦無縛解。亦無行禅便応解脱。如是等不応。是故人異身語可遣。如是。

③　プドガラと五蘊の関係に関する議論のまとめ

もしも我が蘊と別のものであるなら、〔別であると〕仏が説かれたであろう。しかし、「我と身体はそれぞれ独立した別個のものである」とは、仏が説かれていない所であるし、経典もそのようなことを明かしてはいない。

もし我が蘊と別のものであるとしたら、我は蘊の中に在り、かつ総ゆる所に遍満していることになる〔が、そのようなことはあり得ない〕。もしも我が蘊の中に在るのであれば、身体を斫った時や、身体を割いた時に、中にある我を見ることができる筈である。例えば、蚊がウドゥンバラ（udunbara）の果実の中にいれば、そのウドゥンバラの果実を割った時に、蚊を見ることができるように、我が蘊の中に在るのであれば、同様に見ることができる筈である。

又、もしも我が身体と別のものであるなら、冷たいものや熱いものが身体に触れても、我はそれを覚知しない筈である。眼を剔り去った時に、前に倍して物を見ることができる筈であり、同様に、諸諸の感覚器官が壊れた時にも、声や香や味や触等を覚知することができる筈である。

また次に、もしも我が身体と別のものであるなら、この身体から出て別の身体に入り、再びもとの身体に戻って来てその中に入ることができるであろう。例えば、人がこの建物から出て別の建物に入り、再び戻ってこの建物に入るように、我が〔身体と〕別個のものであるなら、そのようにできる筈である。

また次に、もしも我が蘊と別のものであるなら、我は如何なる所にも受生

することがないことになる。もし、様様な所に受生するのであれば、〔五蘊と関係がないのだから〕一念の間に総ゆる所で受生することになる。それ故、常に身体の中に在る訳ではなくなるから、解脱を得ることは難しい。又、様様な所へ行く以上〔五蘊と関係ないのだから〕業を作ることがない。業の果報がないということは、功用のある業が存在しないということであり、つまり、繋縛から解脱することもない。しかし一方禅定を行ずることなく、その儘解脱していることにもなる。

右に述べた如きは、総て正しいものではない。それ故、プドガラが身体とは別個のものであるとする主張は否定されるべきである。

この段で所謂離蘊の我を否定する。孰れも正量部の正義ではないと退けているのである。

先のⅢ3①で所謂即蘊の我を否定し、

4　プドガラの常・無常についての他部派の見解に対する批判

①　プドガラは常であるとする主張に対する批判

イ　生死も常であることになる

幾つかの部派は、前に説かれたように、プドガラは常である、本源がないからである、と主張する。この主張について、今から述べよう。

もしも、本源がなければ常となるのであるなら、生死にもその本源がないのだから常である筈だが、これは正しくない〔生死は無常を本質とする〕。

如諸部前所説。人是常。無本故。如是。我等今説。若無本成常。生死無本亦応是常。此言不応。人無本不可説。如是。

従って、プドガラに本源がない、と言ってはならない。

この段から、Ⅱ4①で紹介された様様な部派の、プドガラを常とする主張を順番に批判して行く。

ロ　同一相続の人に限られている

幾つかの部派は、前に説かれたように、プドガラは常である、過去の生涯を記憶しているからである、と主張する。この主張について今から論じよう。

もしも、我が決定的に蘊と異ったものであるなら、確かに蘊が壊滅する時にもプドガラは滅することなく、過去の生涯の時の事柄を想起するであろう。しかしこのことは、この〔同一の〕プドガラのみに限られており、別のプドガラが存在してはならないことになる。しかも、生死に流転しても断絶する時があってはならないのである。従ってこの主張は正しくない。

ハ　有余涅槃である

幾つかの部派は、前に説かれたように、プドガラは常である、〔永住する〕場所が説かれているからである、と主張する。この主張について今から説こう。

苦を断ずれば、〔有漏の〕流れが滅尽するから有余依涅槃に到達する。身体は猶存続しているから、これを「彼岸に渡って留まる」と言うのである。婆羅門は更に無余依涅槃に至る。「既に〔彼岸に〕至った者は……云々」〔と説かれたのは、彼が〕更に無余依涅槃に至るからである。以上が仏の説かれた言葉の意味であり、それ故、プドガラが常であると説かれた訳ではないのである。

如諸部前所説。人是常。憶過去世故。如是。我等今説。若我定異陰者。陰壊時人不滅。応憶過去世時事。只応此人不応有異人。而輪転生死無断絶時。此語不応如是。

如諸部前所説。人是常。説処故。如是。我等今説。断苦流滅故。至有余涅槃故。身猶存住名之度彼岸住。婆羅門至無余涅槃。既至得無余涅槃故。是仏所説。是故不説人常。如是。

如諸部前所説。人常到不動楽故。如是。我等今説。得無余涅槃時。便至不動楽。若人常者不生不死、如涅槃不生不死。身亦不異。其智慧在所処処亦不異。食不食苦楽無異。常故過去時事不忘。常故無変異。亦無縛無解。是故人常此語応遣。如是。

ニ　涅槃と同じであることになる

幾つかの部派は、前に説かれたように、プドガラは常である、不動の楽に至るからである、と主張する。この主張について今から反論しよう。

無余依涅槃を獲得する時が、即ち不動の楽に至る時なのである。

もしもプドガラが常であるなら、それが生じもせず死にもしないのは、涅槃が生じもせず死にもしないのと同じことになる。又、身体も〔不生不死である涅槃と〕変わりがないことになるし、その〔プドガラの〕智慧も、どこかに在る筈だが、それがどこであろうと、〔涅槃と〕変わりがないことになる。つまり、食べようと何も食べずにいようと、或は苦と楽とに差別がないことになる。又、常なのだから、過去の時のことを忘れることがない筈である。又、常なのだから、変異することがない。つまり、煩悩に縛られることもなければ、それから解脱することもない筈である〔が、それは間違っている〕。

以上によって、プドガラは常であるというこの主張は否定されるべきである。

②　プドガラは無常であるとする主張に対する批判

イ　有漏の五蘊である

幾つかの部派は、前に説かれたように、プドガラは無常である、本源があるからであると主張する。この主張について、今から吟味しよう。

有漏の五蘊が生起するから、それに対してプドガラという名が与えられて

如諸部前所説。人無常。有本故。如是。我等今説。有漏起故。是名説人。以是故。不可言陰与人異。是故人起

不可説。以是仮説即答解前次。

この段から、Ⅱ4②のプドガラを無常とする各主張を批判する。

末にある「以是仮説即答解前次」と全く同じ文が、次節のⅢ4②ロにも現れる。一応右の如く訳したが、或はこの「前次」を「前の時、前回」の意味に取り、「解答は〔五蘊とプドガラの関係を論じた〕前の章で既に述べた」という意味に理解すべきかも知れない。ともあれ、Ⅳで正量部の説くプドガラが如何なるものであるのかが説明される。

仏説新等故。若人無常者。衆生輪転所作善悪業壊。不作善悪業自来。無先因故。一切衆生悉応一種不造業。応解脱者不由業自成。既不由業自成功徳。無所為先世時生亦無可憶。是故人無常此語応遣。以是仮説即答解前次。倒法故。落生故。生老病死法故、人無常①。如是。

ロ　業も滅尽することになる

又、仏が「新に……云々」と説かれているから〔プドガラは無常である、と主張するが〕、もしもプドガラが無常であれば、衆生の流転するのに従って、それ迄に為した善悪の業も〔一緒に〕壊滅することになる。そうなると、先行する因がないのだから、善悪の業を作さないのに、自ら生じて来たことになる。

一切衆生は一種として業を造ることがなくなり、解脱した者も、業によって解脱したのではなく、自然に〔何もせずに〕解脱を得たことになる。既に業によることがないのであるから、自然に功徳を具備することになる。又、業を為すことがないのであるから、過去世の生涯について想起できることは何もないことになる。

いるのである。それ故、蘊とプドガラが別のものであると主張してはならない。そうである以上、プドガラが生起することに関しては説くことができない筈である。

これは仮説であるからであって、〔これ等の問題に関する我我の正しい〕解答は次章〔Ⅳ　プドガラの種類〕以下に説かれる。

以上によって、プドガラは無常であるというこの主張は否定された。これは、仮説であるからであり、真の解答は次章以下に説かれる。

（ハ）倒れるものであるから、（ニ）没し生じるから、（ホ）生老病死するものであるから、プドガラは無常である、とする主張についても同様である。

「新たに……云々」と説かれる経は、Ⅱ4②ロで引用された「新生の天」についての経であるが、DN 19. Mahā-Govinda Suttanta に対応部分を持つ。

①原文は「生老病死法、人無常故」であるが、「故」の位置が混乱しており、前後の文脈から改める。